

本を選ぶ。本を読む。本を語る。それらが人をつなげていく。

私たちが住む伊予市には、公共図書館と小さな個人書店が3軒ある。書店のない自治体が増えている昨今、それは恵まれていることかもしれない。ただ、公共図書館の分館と移動図書館サービスはない。図書館と書店は主に中心市街地にある。そのような地域で、私たちは「人」と「人」がつながる「本」の活動を行っている。主な活動は、古本交換会の開催、私設図書館の運営、紹介型読書会の開催、冊子『いよ百冊物語』の発行である。

本を選ぶ喜びを。活動のひとつである古本交換会は、その名の通り本を交換するイベントである。産直市の公園広場に、私たちが約800冊の本を並べる。時間内出入り自由で、家庭で不要になった本があれば持って来てもらい、その場で1冊につき1冊を交換する。2020年から始め、毎月開催を続け、現在までに107回実施している。常連が多く、家族連れで参加する人も多い。

いつの間にか青空の下の移動図書館という形になってきた。先月交換した本を読んで、今月それを持ってくる。新しい本と交換し、それを読んでまた来月持つてくる。もちろん気に入った本は手元に置いてよい。お役御免になった本だけを交換すればよい。貸出期限のない「移動図書館」というわけだ。もちろん交換に料金はいらぬ。「お金が無くてなかなか本が買えないから、こうやって交換して新しい本に出合える場があるがありがたい」との声をもらう。もちろ

## まちむら発見②

# 本と人をつなぐ本をとおして 人と人をつなぐ

愛媛県伊予市 いよ本プロジェクト運営委員会



産直市での古本交換会の様子

ん、ここで得た本をきっかけに書店や図書館に赴く人も多く、この古本交換会は読書文化を支えている。

また、高齢者が気軽に徒歩で利用できる。書店等へ行くには車の運転ができず、電車の利用も負担になるが、この古本交換会には歩いて行ける。中心市街地から距離がある公民館で行う際には、それが顕著に現れる。いつもは家族に頼んで本を借りたり、買ってきたりしてもらうが、「今日は私の目の前に本がある。私の手で選ぶことができる」という喜びの声を聞く。兄弟姉妹が手をつないで、あるいは友だちと連れ立って来る子どもたちもいる。徒歩でも自転

車でも遠い公共図書館だが、近所の公民館には、子どもだけでも足を運ぶことができる。そして、人が集まると隣り合った人どうしでいつの間にか会話が始まる。公民館では特に、地域内で互いを知る場になり、多世代で交流が生まれている。

人と触れ合う喜びを。私たちが運営している私設図書館は少し変わっている。図書館ではあるが、静かにする必要はない。私設ならではの自由な図書館である。「ここに来ると誰かに会える」。一人暮らしや障がいを持つ人を含め、多くの人がここでの出会いを楽しみにしている。時には宿題を持ってきた小学生と一緒に算数の問題を考えたり、地域史を研究している人から学んだりする。

コロナ禍では、公共図書館・児童館等が休館してしまい、親子で行ける場所が無くなった。「子どもじゃない、親の私が窮屈で苦しいんです」との声を受け、私設図書館では幼児を持つ家庭を受け入れた。その際には、家庭の孤立を考えさせられた。子どもは家族だけで育てるものではない。家庭を地域で包括し、皆で育てるものだ。この私設図書館がその場の一つになっていったことを、とても嬉しく思う。そんな家庭に公開保育の案内をしたり、障がいを持つお子さんの保護者にサポート団体を紹介したりすることもある。学校に行きづらい子どもたちを貸し切りで受け入れたこともある。のびのびとカードゲームをしたり、本の世界に入り込んだりする彼らはとても生き生きとしている。

本でつながる喜びを。2019年から始めた紹介



冊子『いよし百冊物語』『いよし百冊物語2』



私設図書館ピブリオ AA

型読書会でも、本が人を近くすることがよくわかる。「読書は孤独なものだと思っていた。本の話をとることができるのがこんなに楽しいものだとは思わなかった」。そんな好評を得て、現在も76回を超えて開催を続けている。一昨年はこの紹介型読書会が発展して冊子を作成した。伊予市に住む人・関わる人、約百人にお勧め本を紹介してもらい、それらをまとめた冊子『いよし百冊物語』である。この冊子は、単なるお勧め本の紹介ではない。冊子を読んで、校長となつたかつての担任の先生を訪ねた人がいる。郵便局で「素敵な紹介でした」と話しかけられた人がいる。本を手段に多くの人を紙面から対面へとつなげていった。

こちらは補助金を活用して作成したが、好評のため第2弾を自分たちで資金を集め発行することになった。主に伊予市市民や市内にある商店・団体が資金調達や宣伝面で協力してくれ、目標額を超える製作費が集まった。完成した『いよし百冊物語2』は、伊予市の人々の思いが形になった冊子だと、皆が一緒に発行を喜んでくれた。

私たちの活動はイベント参加料や補助金から成り立っているが、支援会員やご寄付の存在も大きい。伊予市の人々の思いが、活動を支えてくれている。そんな私たちに對して、文化度や民度が高いと市外の人は言う。読書という素敵な手段で人が幸せになる町(まち)を目指して、私たちは今日も活動を続けている。

(いよ本プロジェクト運営委員会代表 岡田有利子)